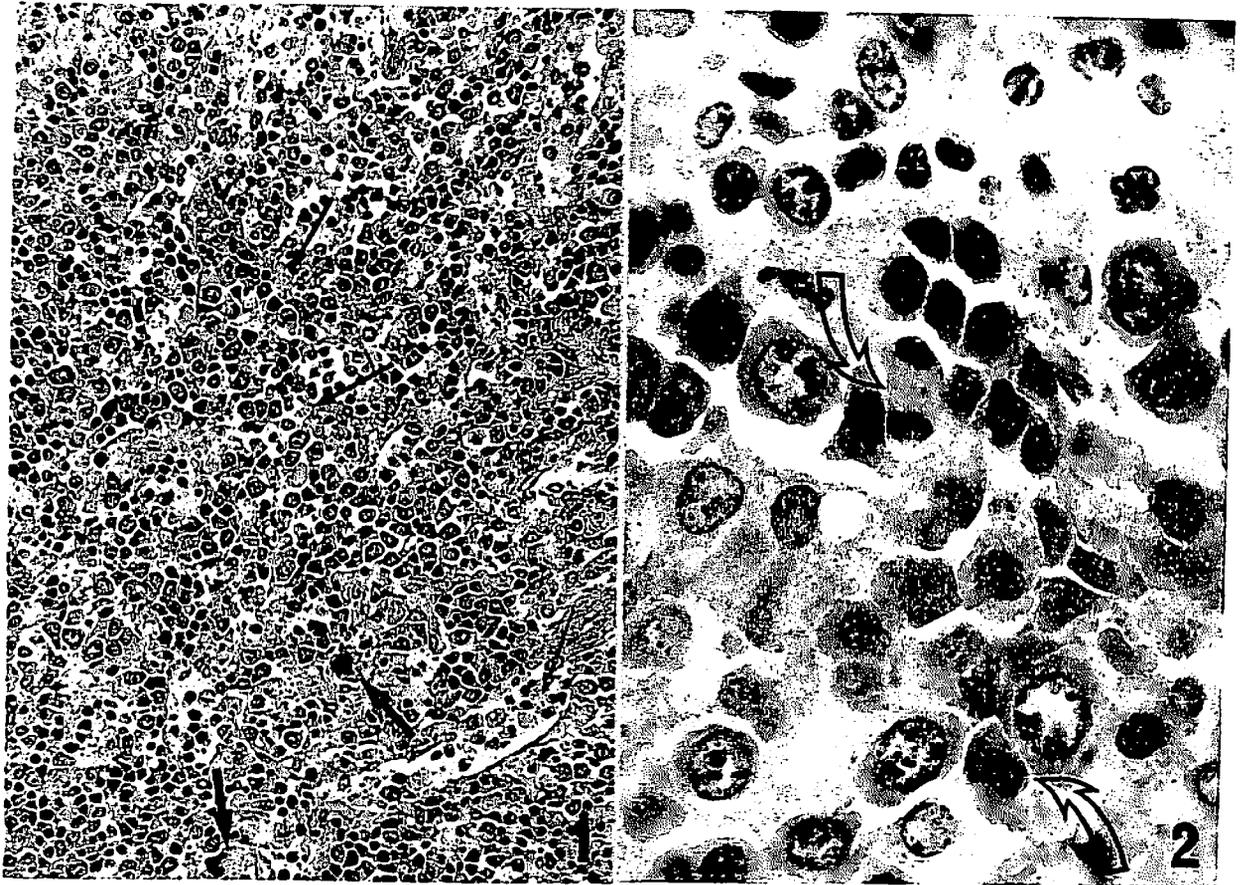


イヌの脾臓の類骨髄化生

鳥取大学農学部家畜病理学教室出題 第18回獣医病理学研修会標本No.279



動物は雌イヌのシェパード種で、47日齢で自然死した。生前の主要所見は、著明な貧血（ヘマトクリット値15）と軽度の白血球減少症（ 66×10^2 ）であった。血液塗抹では、菲薄赤血球、幼若多染性赤血球が見られ、中等度の赤血球大小不同症を示し、標的赤血球、有核赤血球、塩基好性赤芽球が散見された。白血球百分比は、好中球68.5%，リンパ球31.5%で、その他は0%であった。なお、幼若赤血球ならびに異型リンパ球は確認されなかった。これらの所見から、血液学的には著明な貧血と造血亢進と見なされた。

肉眼病変としては、著明な脾腫が注目された。腫大した脾臓は25cmの長さで、被膜は緊張し、辺縁は円味を増し、褐赤色調が強かった。

脾臓の組織学的主変化は、赤脾髄における瀰漫性の高度な造血事象である。それは図1、2（ホルマリン固定後のエポソ包埋薄切切片、HE染色、図1は $\times 232$ 、図2は $\times 1160$ ）に示すように、赤脾髄における造血細胞の著明な増数であった。造血細胞は赤芽球系細胞が圧倒的に多く、なかでも、血球芽細胞、前赤芽球、多染性赤芽球などが優勢に認められ、これらには核分裂像も伴われ

ていた（図2矢印）。なお、赤芽球系細胞の一部は、小島状に群在する傾向にあった。このほか、巨核球（図1太い矢印）ならびに前骨髄球、骨髄球が、少数ではあったが散見された。さらに、崩壊赤血球あるいは血小板と解せられる微細顆粒が、数個～10個内外の小群をなしてしばしば観察された（図1細い矢印）。リンパ小節は概して小さく、主に小型～中型リンパ球から構成され、この周縁部には前述の造血細胞が混在し、その境界は不明瞭であった。なお、リンパ小節には胚中心の形成はなかった。脾臓以外では、軽度の髄外性造血が、肝臓類洞、肺胞壁、リンパ節髄索において観察された。

以上の所見から、本例を“脾臓の類骨髄化生”と診断する。この脾臓の変化は、貧血に対する代償性変化と解せられるが、貧血の原因は明らかにし得なかった。人医学においてのこの種の変化は、原発性と二次性とに分けられており、前者では骨髄に変化がなく、原因不明の結果生じ、後者では骨髄の腫瘍、硬化症、線維症による骨髄の造血阻止の結果生ずると言われている。今回の例では骨髄は検索され得ず、脾臓の変化が原発性か二次性かの決定はされ得なかった。